

# 善と幼児の心

— 幼児はどう教育さるべきか



古田 紹 欽

「善と幼児の心」というとき、まず「幼児の心」が問われなくてはならない。心理学的に考えれば人間の心の発達を段階的に区別して、「幼児の心」をみることができようであろうが、私がここで取り上げたいのは、そういう意味からではない。幼児は一人前の人間ではないにしても人間であり、その心は幼稚であるにしても、人間の心として見なくてはならない。幼児は一人前の人間となるために教育されなくてはならないが、この場合、幼児の心が教育されなくてはならぬことはいうまでもなく、その心はたとえ素朴なものであっても、人間教育の対象

として重視されなくてはならない。人間生まれて心をもたないものはない、人間が教育されなくてはならないとすれば、当然そのもつ心の教育がされなくてはならない。人間は一生涯が修業だといわれるが、そのことは一生涯が心の修業で、心の教育につとめなくてはならないことを指している。幼児は親の下にあって扶養され、漸く生きている存在ではないが、人間に負わされた教育の責任は、すでにこの時期に始まっており、扶養の義務をもつ親は、その負わされた責務が果たされるように、教育に当たらなくてはならない。幼児がもし教育を受

けなかったならば、動物のような心をもって成長することになるかも知れない。幼児を教育するということは、おとなの眼からすると一見、簡単なようにも思えるが、実はなかなかどうして容易ではない。幼児を教育するのはなんととしてもその親であろうが年齢は必然的に隔りをもち、隔りがあるということはお互いの間に共感をもつことを確かにむずかしくしていよう。このことは教育にあっても例外のこととはいえない。教育するものと、されるものとの間に隔りがあるとすると、共通の場を見出すためには、親が余程努力しないといけない。つまり親から子に近づく努力がされなくてはならない。子が幼少であればあるほど、その努力は一層必要である。

教育というと、一般的には何か技術的なことのように思うが、かりに、技術的な点に負うものが多いとしても、幼児にあっては、その技術的なものに応ずる能力がまだ欠けている。能力が欠けていて

はどんなすぐれた技術も役に立たない。技術的にわかり易い方法をもって幼児を教えたら、それで教育目的を達するかといえはそうはいかない。幼児とおとなとは、理解する入れものが違っている。おとながより多くのものを入れようとすれば、幼児の小さな入れものはあふれる。これは入らないということである。あふれるまで注がれることは幼児にとっては負担であり、重圧であり、折角のすぐれた教育の技術も幼児から拒否され嫌悪されるに至ろう。そうなたら期待した教育成果には逆なことにもなる。

幼児を教育するには相手が幼児であるだけに、教育技術が十分に考慮されなくてはならぬが、はたして技術的な考慮のみで十分であろうか。幼児教育が家庭教育から全く切り離されないのは、家庭の愛情、ことに母親の愛情が大きな教育上のきづきになっているからである。

幼児教育において「幼児の心」ということがいわれるならば、心の教育をなす

ものはなんととっても愛情である。

幼児教育は機関としては幼稚園において行なわれる。幼稚園は、幼児の知的面の教育をなすのに大きな役割をなすが、その教育が成果をもつには、やはりその教育の根底に、母親の愛情が何等かのかたちでなくてはならなからう。愛情は純粹の人間のもつ本能的なものである。幼児は極めて純粹であるだけにその本能は強い。もともとそれが強いといっても受動的に強いので、幼児教育はこの受動的に強い欲求にこたえなくてはならない。

ところで、幼稚園教育は家庭教育と目的とするところが同じではない。家庭から離れて他人との集団的教育を行なうためには、幼児を母親的愛情に甘やかしてはできない。幼稚園教育にも、家庭の延長としての愛情による教育がなくてはならないが、そうかといって各家庭におけるような母親の愛情がそのままもち込まれては困る。問題はのかね合ひであるが、ただ幼児は自分自身ではそのか

ね合ひをはかることができない。どうしてもおとながそのかね合ひを理解して幼児に与えなくてはならない。そこに幼児とおとなとの間に完全に一致しないものがある。幼児教育の苦勞は常にこの点にある。おとなと幼児との隔りをうめるには教育の技術だけではとてもうめられないが、この苦勞を解決することによって、その隔りをいくらかでもうめることができる。

幼児は満三歳にもなると自我意識をもつようになり、気に入らないことには一種の反抗心をもつようになるが、こういう意識が現われて来たことは、教育を受け得るだけの能力を幼児が具えて来たことを示している。反抗は、わけわからずで、無理なことをいって母親を手こずらすこともあるが、よくいって聞かすと納得するだけのものをもつようになってきている。幼児が自我を主張するようになったことは、独立しようとする意志のきざしであり、母親の愛情から離れようと

する意志の現われでもある。幼稚園の知的教育はこのきざし、現われを掴まなくてはならない。幼児とおとなの年齢的隔りは、つとめておとなの方から縮めるようにしなくてはならないが、幼児の自我意識の覚めによって、幼児の方からも縮められようとしてくる。この両者の共通の場は技術的なことによってではなく、本質的に縮められることにもなろう。

幼稚園教育の重要な点は、さきやかな自我意識をいさぐようになった幼児に、何が善いことであり、何が悪いことであるかを教えることである。善悪についての正常な判断は、社会が複雑性を加えるにつれ、おとなでも迷うことが多いのであり、幼児にそうした判断ができるわけではないが、幼児の世界での善悪はおのずからあるはずである。何が善いことであり、何が悪いことであるかを教えるについては、おとなの世界からではなく、幼児の世界に立つてのことではなくてはならない。この立つてということとは、あるいは

いっしょになってといった方がいいかも知れない。この点、幼稚園での教育者は、おとなに幼児を引き上げるのではなくて、教育者が幼児に自分を引き下げることでなくてはならない。

話は協道にそれるが、教えるということとは間々<sup>\*</sup>教えられることでもあるのであり、無心な幼児の言動におとなが反省させられ、感激することも決してないことではない。幼児の無心に描いた画などに、時にはおとなの専門画家の力量をもってしても及ばないような傑作がある。もちろん、幼児の自我意識は未熟であり、断片的で一貫性がなく、画などにもある時は素晴らしいものを描くかと思うと、次には画だかなんだかわからないようなものを描いたりする。うっかりしていると襖だの、壁だのにクレヨンでいわずらぎを為しかねない。画を描こうとする幼児には、描くことを教えることが教えることであるが、もう一つ何に描かなてはならぬかを教えずにはならない

い。幼児が自分の意志で描くことができようになる、きつと描くことに喜びと楽しみを覚えるであろうが、その際、襖や壁に描いてはならないとたしなめることは、その喜びと楽しみを抑えることになり、幼児に描きたいという衝動が幼児に強ければ強いだけ、抑えることは反発を招くようなことにもなろう。

登山家に、君はなぜ山に登るのかと尋ねたら、目の前に山があるからだと言えたというが、幼児が画を描く心理は恐らくこれと変わらない。描くものが目前にあるから描くということであろう。

それでは幼児が襖に落書きをしたとして、これをどう教えるかである。何に描かなくてはならないかを教えるにしても、襖には描くものではないという判断はまだ幼児にはできない。まして襖が画の描いてあるものであったら、幼児はそれにならう、これは画を描くものであると思うかも知れない。幼児に対して描くのは何に描かなくてはならぬかを教え

るためには、描いてはならないものに描いた時、まず叱ることが必要である。

幼稚園は、画でいえば自分で描くことを覚えたような幼児を收容しているのであり、従つて覚えたことによつて落書きをするような、間違ひを起こす可能性をもつたものを收容しているのであり、幼稚園教育は、描いてはならないものに描いたり、また描こうとするものがあつたら、叱つてそれが間違いであることを教えるものでなくてはならない。幼稚園教育は叱る教育であるといへば、あるいは誤解をする人もあろうが、叱ることは非情的の持ち主では出来ることではない。感情的に衝動的に怒つて叱るというのでは別であるが、叱ることが愛することであるといふことがないわけではない。

禅宗の修行などは、徹底した叱る教育であるが、その叱ることには先輩の深い道愛どうあいが含まれているのであり、修行者は叱られたことに對して、手を合わせて拝み、その道愛に感謝したという実話が古

来からいくつも伝わっている。幼稚園教育を、禅の修行者の教育と同一視することはできないが、愛情をこめて叱るといふことは、幼児のような、自分の行動に善悪の責任のもてないものにあつては、おとながしなくてはならない戒めである。

この叱るということは、強いものが弱いものに対してそうするのではなくて、おとなが幼児の立場になつて叱るといふことであり、幼児の立場になれば、幼児への理解、愛情が必ず伴うにきまつており、腹を立て、にくんで叱るといふことにはならない。

幼児は愛情がなくては育たないが、その愛情がもし幼児を甘やかす愛情であつたとしたら、育つには育つても、人間として育つことには恐らくならない。母親的愛情がなくては幼児は育たないが、その愛情が盲目的なものでないためには、愛情につながりながら、それを否定するものが一面になくなくてはならない。

幼稚園は、幼児にそれが否定されても

育つ能力を具えようとする時期に、家庭から離して教育しようというのであり、この教育には叱ることがなされるなくてはならない。実際、叱るといふことは非情のことのように思うが、教育に自信と責任とがなかつたらできることではなく、また本當の深い愛情がなかつたら、なし得ることではない。愛することはやさしいが、叱ることはむずかしいことともいい得る。ただ、こういうことがいわれるには、余程の徹底した人間愛の持ち主でなかつたら出来ることではない。

幼稚園の教育は、たかが知れた幼児がその対象と考へたら、大いに間違つている。人間教育の出発点をなすものであり、出発点を踏み違へたら大変なことになる。教育は大学教育の現状をみるにつけて、これまであまりにも甘やかして過ぎてきたようである。人間教育はもっと厳しいものでなくてはならない。幼児教育だといつても、それを除外例としてはならない。

(日本大学・宗教学専攻)